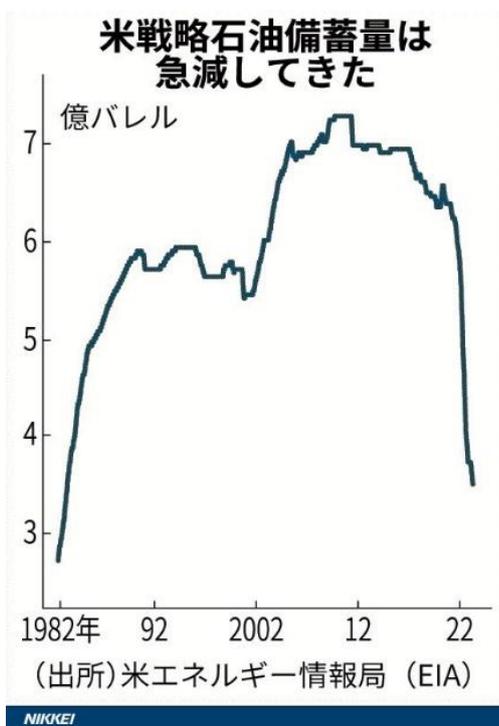




米石油備蓄、来月にも増加 エネ安保重視へ回帰

米国の戦略石油備蓄（SPR）が8月、約3年ぶりに増加に転じそうだ。備蓄量は6月末時点でおよそ40年ぶりの低水準だ。放出の契機となった原油やガソリン価格の高騰が足元で落ち着くなか、インフレ対策からエネルギー安全保障を重視する姿勢への回帰を鮮明にする。市場では原油相場の下支えにつながるとの見方が出ている。



「エネルギー安全保障の使命を果たす」。7日、米エネルギー省（DOE）は米国のエネルギー企業に対し、計600万バレルの石油の売却に応じるよう声明を出した。引き渡し時期は10月と11月を予定する。

8月に引き渡す300万バレル、9月の引き渡し分の320万バレルの契約もすでに結んでおり、備蓄量は8月から増加する見通しだ。過去に民間企業に貸し出した分が返却されるなど実務的な要因を除けば、増加は2020年7月以来となる。

SPRは第1次石油危機を受け、1975年に導入された。戦争や紛争などによって石油の供給が難しくなる場面に備え、民間から買い入れた石油を米南部テキサス州などの備蓄基地に貯蔵しておく。

米バイデン政権は、22年2月のロシアによるウクライナ侵攻などに伴う原油やガソリン価格の高騰を抑えるため市場に備蓄を放出してきた。DOEによると、備蓄放出によってガソリン価格は1ガロンあたり最大0.4ドル押し下げられたという。米エネルギー情報局（EIA）によると、6月末時点のSPRは3億4715万バレル。21年末時点より約4割減り、1983年以来およそ40年ぶりの低水準となった。



ここに来て積み増しに動くのは、有事の際の供給懸念が高まってきたためだ。共和党の一部議員は「石油輸出国機構（OPEC）やロシアがエネルギーを地政学的兵器として利用する可能性が高まっている」とバイデン政権を批判した。

バイデン政権は脱炭素に向けた政策を進めているが、22年の新車販売に占める電気自動車（EV）の比率は8%程度。なお大半はガソリン車が占める。備蓄の余力がなければ、必要に応じた放出が難しくなり国民の不満が政権に向かいかねない。

原油やガソリン価格、インフレ率が落ち着いてきたことも影響している。米原油指標のWTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）先物価格は足元で1バレル73ドル近辺と、22年3月につけた130ドル超から4割超安い。ガソリンの小売価格も1ガロン3.5ドル台と22年6月のピーク（5ドル超）に比べ下げている。

エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の野神隆之首席エコノミストは「優先順位がインフレ対策から安全保障に移った」と分析。「売却から購入にシフトすることで原油価格を下支えする」とみる。

ただ、直ちに放出以前の水準まで積み増すのは難しい。11月までの買い入れ量はおよそ1200万バレルの見込みと、22年の2億バレル超の減少分を補うには遠い。シェールの開発が進みエネルギーの自給率が高まったため、過去のような備蓄水準は必要ないとの見方もある。

足元の原油価格の上昇も買い付けを鈍らせる可能性がある。DOEが買い戻しに動く原油価格「1バレル72ドル以下」をすでに上回っている。日本総合研究所の松田健太郎副主任研究員は「積極的な買いには動きにくく、原油価格の一段高にはつながりにくい」と話している。



パーム油、半年ぶり下落

揚げ油や洗剤原料などに使うパーム油とヤシ油の7月の卸値が下落した。パーム油は半年ぶり、ヤシ油は2カ月ぶりの値下がりとなる。植物油で競合する大豆油が5月下旬～6月上旬にかけて下落基調で推移し、パーム油やヤシ油の相場にも波及した。

製油会社が加工油脂メーカーや製麺会社などの需要家に販売する7月のパーム油の卸価格は1キロ255～265円と、前月に比べて中心値で14円（5.1%）の引き下げとなった。ヤシ油は1キロ430円と同6円（1.4%）下げた。パーム油は1月以来、ヤシ油は5月以来の下げとなる。

パーム油の国際指標となるマレーシア市場の先物価格は、6月初めに一時1トンあたり3194リングと、2021年1月以来2年半ぶりの安値を付けた。大豆油が5月末に値下がりし、パーム油の下げ圧力となった。中国の景気回復の遅れによる低調な需要や、ブラジル産大豆の豊作などを反映した。ヤシ油も国際指標となるロッテルダム相場が5月末にかけて値下がりし、7月の国内卸値に影響した。

もっとも足元のパーム油先物は3800リング台まで戻すなど、国際相場は反発傾向だ。大豆油相場が米国の作付面積の予想外の低下などを背景に上昇に転じた。マレーシアの6月末のパーム油の現地在庫は前月比1.9%増と市場予想を下回るなど、需給面もタイト感が意識されている。国際相場の反発や円安傾向などでメーカーの原料調達コストは上昇しており、8月以降に国内価格に反映される可能性もある。



重要鉱物市場、5年で倍増 リチウムの需要拡大けん引

国際エネルギー機関（IEA）は11日、電気自動車（EV）などに使われる重要鉱物の市場規模が2022年に3200億ドル（約45兆5000億円）に達したとの試算を初めて公表した。リチウムの需要拡大がけん引し、5年間で倍増した。生産や加工が中国など一部の国に偏在している実態も浮き彫りとなった。

重要鉱物の首位国とシェア			
リチウム	生産	オーストラリア	47%
	加工	中国	65%
コバルト	生産	コンゴ民主共和国	74%
	加工	中国	76%
ニッケル	生産	インドネシア	49%
	加工	インドネシア	43%
レアアース	生産	中国	68%
	加工	中国	90%
グラファイト	生産	中国	70%
	加工	中国	100%

(出所) IEA

NIKKEI

EV向け電池の主要材料であるリチウムでは、22年の需要が5年前の17年比で3倍となった。コバルトは7割、ニッケルは4割それぞれ増えた。EVや太陽光発電などの普及に加え、重要鉱物の価格高騰から、30年には全体の市場規模はさらに2~3.5倍に膨れ上がると予測する。

IEAのビロル事務局長は日本経済新聞の取材に応じた。EVや再生可能エネルギーのほか、原子力発電を含む「クリーンエネルギー」へのシフトを踏まえ「重要鉱物の市場規模は急成長を遂げるだろう」との見方を示した。

一方で課題として「重要鉱物を供給する国の多様性が乏しい」点を指摘した。例えば、世界のリチウム加工・精製では65%を中国が占める。30年までの精製プラントの新設計画でも半分が中国国内に偏在している。



18年から21年上期にかけて中国企業は川上であるリチウム採掘に計43億ドルを投じた。資源大国である米国とオーストラリア、カナダの企業を合わせた投資額の2倍に相当し、リチウム供給を中国に依存する状況は今後も続く可能性が高い。

さらに世界のコバルト生産では74%がコンゴ民主共和国に偏る。30年までのニッケル精製の新設計画ではインドネシアが9割弱を占める。

EV用モーターや風力発電タービンに使われる永久磁石の生産に不可欠なレアアース（希土類）では世界の生産の68%、加工の90%が中国に集中している。

生産や加工が一部に偏れば、有事の際にサプライチェーン（供給網）の分断リスクが高まる。IEAは今後、加盟30カ国を中心に、調達が多様化や新たな資源国への共同投資、リサイクル網の拡充などを検討する。

環境への負荷も高まる。ビロル氏は「重要鉱物の生産や加工時の二酸化炭素（CO2）排出や水資源の使用で、環境への悪影響が出ていることも懸念している」と述べた。重要鉱物の排出量は生産増に応じて伸びている。

今回の試算は主要7カ国（G7）の要請を受け、IEAが取りまとめた。G7は重要鉱物の生産・加工が一部の国に偏っている状況を問題視する。



円相場、一時1ドル=139円台に上昇 1カ月ぶり円高水準

12日の東京外国為替市場で円が対ドルで上昇し、一時1ドル=139円台をつけた。6月14日以来およそ1カ月ぶりの円高・ドル安水準。日銀の金融政策決定会合を27～28日に控え、長短金利操作（イールドカーブ・コントロール）を中心とした現在の大規模な金融緩和策を見直すとの警戒感から円買い・ドル売りが増えている。

円は6日には144円台後半で推移しており、およそ1週間で5円近く円高・ドル安が進んだことになる。12日に発表する6月の米消費者物価指数（CPI）が前年同月比3.1%上昇と5月の4.0%上昇から大幅に鈍化すると市場で見込まれていることも、幅広い通貨に対するドル安圧力として意識されている。

市場では「海外勢が下半期に移るタイミングにあたり、利益確定目的で円を買い戻す動きが入りやすくなっている」（邦銀ディーラー）との声もある。6月30日に今年最安値となる1ドル=145円をつけるなど一方向の円安・ドル高が進んでいたことで、巻き戻しの動きが大きくなった面もある。



週間原油コストの推移

	期間	原油相場		為替(▲は円高)		円建て原油コスト	
		ドル/バレル	前週比	ドル/円	前週比	円/ℓ	前週比
火曜日～ 月曜日	5/30～6/5	73.20	▲2.67	140.68	0.22	64.77	▲2.25
	6/6～6/12	74.94	1.74	140.54	▲0.14	66.24	1.47
	6/13～6/19	74.20	▲0.74	141.49	0.95	66.03	▲0.21
	6/20～6/26	75.78	1.58	143.50	2.01	68.39	2.36
	6/27～7/3	74.76	▲1.02	145.27	1.77	68.30	▲0.09
	7/4～7/10	77.02	2.26	145.05	▲0.22	70.26	1.96
水曜日～ 火曜日	5/31～6/6	73.01	▲3.12	140.55	▲0.27	64.54	▲2.89
	6/7～6/13	74.63	1.62	140.56	0.01	65.97	1.43
	6/14～6/20	74.91	0.28	142.00	1.44	66.90	0.93
	6/21～6/27	75.51	0.60	143.78	1.78	68.28	1.38
	6/28～7/4	74.73	▲0.78	145.46	1.68	68.37	0.09
	7/5～7/11	77.30	2.57	144.43	▲1.03	70.22	1.85

※原油はドバイ、オマーン平均、為替レートは三菱UFJ銀行のTTSレート